

沼津市

明治史料館通信

2003.11.25 (季刊 年4回発行) Vol. 19 No. 3 通巻第75号



西川鐵次郎
 補長崎控訴院長
 明治三十九年七月十日
 司法省

長崎控訴院長の辞令
(西川創氏寄贈)



西川鐵次郎
(西川創氏寄贈)

明治33年(1900)5月上野精養軒にて撮影
開成学校・東京大学の同窓会か
(西川創氏寄贈)

前列右より馬場憲次・斯波淳六郎・高橋捨六・金井延・山岡次郎・河野鯉雄・小川鑄吉・秋山源蔵・中山寛六郎・木場貞長、
 第2列右より吳文聡・末延道成・高橋是清・辻新次・浜尾新・菊地大麓・服部一三・高平小五郎・杉浦重剛・石本新六・山口宗義、
 第3列右より樋山資之・丹羽義五郎・平井晴二郎・井上正一・箕作佳吉・中村弥六・鳩山和夫・鈴木充美・関直彦・内田三省・由布武三郎・田中正平・三崎亀之助、第4列右より渡辺渡・小木真正・寺尾寿・桜木省三・高橋二郎・桜井房記・原口要・鈴木文雄・西川鐵次郎・山崎旨重、第5列右より福与藤九郎・増田礼作・棚橋一郎・中隈敬之・阪谷芳郎・和田雄治・上原六四郎・鳥居忱・中島鋭治・近藤仙太郎・白石直治

シリーズ

沼津兵学校とその人材

68

白虎隊出身の留学生

西川 鐵次郎

維新の勝者・敗者の差は、沼津兵学校に集った諸藩の留學生の中にも歴然とみられた。附属小学校の生徒出身者のひとり黒川正（ペンネーム金城隠士）は、後年沼津時代を回顧し、学資が豊かで服装・持ち物も貴公子のようだった越前からの留學生齋藤修一郎（福井藩の支藩武生藩士）と「学資は衣食の料にも足らず、止を得ず教授方の家に寄食」していた斗南藩（旧会津藩）からの留學生西川鐵次郎とを比較し、二人の「コントラストは実に甚しいものであった」と記している（『沼津時代の回顧（六）』

は、会津藩士西川俊治（舛益・定之進・鐵之助）の次男として生まれた。戊辰戦争時には、十六歳で白虎隊に入り、越後を転戦、降伏後は越後高田に幽閉された（『福島県史22人物』一九七二年）。

『静岡民友新聞』大正二年七月二十七日）。しかし、沼津本町の花柳界に出入りし、若年の身で芸者遊びの味を覚えていたという齋藤に対し、西川は数学の才があり、同級生たちから重んじられていたという。

四歳年上の兄彦太郎は、万延元年（一八六〇）家督を継ぎ、藩の御旗附与力、御書簡物書調役などをつとめ、維新後は東京で謹慎生活を送り、明治三年（一八七〇）八月に斗南藩の領内に移住した。廃藩後は郷社の祠官になった。

履歴書によると、鐵次郎は明治三年（一八七〇）七月に静岡藩に留学し、沼津小学校（沼津兵学校附属小学校）に入学、西週の教えを受けたとあるので、兄一家が東京から斗南に移住するにあたって、ひとり沼津での勉学の道を選んだのかもしれない。

四年（一八七二）「事故ニヨリ出京」、七月には大学南校に入ったというので、沼津にいた期間は一年

西川鐵次郎（嘉永六年十二月二十四日生、昭和七年六月一日没）

未満であろう。翌五年（一八七二）給費生となり、八年（一八七五）七月予科を卒業、九月本科に進み引き続き開成学校（大学南校の後身）で法学を専攻、十一年（一八七八）七月東京大学法学部（開成学校の後身）を卒業した。ちなみに、齋藤修一郎は、西川より一足早く明治三年貢進生として大学南校に入学、やはり法学を専攻した。

なお、大学南校・開成学校で教えたアメリカ人教師グリフィスが生徒たちに提出させた『The story of my life』という英文文の中で、西川は「私は九歳か一〇歳で、私塾で漢籍の学習を本格的に始めた」「私は一歳か一二歳の頃藩校に通いはじめて、そこを卒業する二一歳まで教育を受けた」（蔵原三雪『洋学学習と漢学教養―幕末維新期の学問動向のなかで―』、幕末維新期漢学塾研究会編『幕末維新时期漢学塾の研究』、二〇〇三年、溪水社）と記しており、沼津遊学以前において会津の藩校での学歴があったことがわかる。

大学卒業後、外務省に入り英国公使館書記生として赴任、十四年（一八八一）帰国後は内務省に転じ、さらに十八年（一八八五）文部省権少書記官となった。翌十九年に判事に任命され、以後長く裁判官を勤める。水戸始審裁判所長（明治二十三年）、水戸地方裁判所長（同年）、大審院判事（同年）、横浜地方裁判所長（三十一年）、函館控訴院長（三十五年）、長崎控訴院長（三十九年）といったところが主な履歴である。英吉利法律学校（現中央大学）の創立にも関わり、保険法などの講義を担当している（『図説中央大学』一九八五年、学校法人中央大学）。

なお、旧幕臣で沼津兵学校第九期資業生関戸孝の四男を養子にしており、沼津時代の人脈がその後も続いたらしいことがわかる。

司法官僚として立身を果たした西川は、敗者としての悲哀を味わい苦難の道を歩んだ明治の旧会津藩出身者の中で、山川浩（男爵・山川健次郎（東大総長）兄弟、柴四郎（小説家・政治家）・柴五郎（陸軍大将）兄弟、出羽重遠（海軍大将）らと並ぶ、数少ない成功者だった。（樋口雄彦）

江原素六とその周辺〈38〉

江原素六と侠客

明治四十四年（一九一）一月に発行された雑誌『日本及日本人』第五四九号は、「現代諸家の侠的人物観」という特集を組み、各界名士の侠客論を掲載している。

たとえば、大隈重信は「任侠なるものは、政治の腐敗、墮落より生じたもの」であり、「立派な法治国、堂々たる立憲政体」の今日においては、「封建時代の弥縫策」たる武士道も任侠道も不要であると主張する。上田敏（文学博士）は、社会主義という「危険思想」が発生し、黒住教・天理教・金光教・耶蘇教などの宗教を頼る者が少ない今日、今日の思想界において、武士道の鼓吹や報徳の教えを掲げるのも良いが、「二種任侠的の性質を帯びた偉人」の必要性を強く感じると言う。幸田露伴は、「若し徳川の文学や小説から侠客と仇討を除いたならば、其の余は極めて索莫たるものであらう」と述べている。同誌には、江原素六も「辰五郎

と次郎長」という短文を寄せている。江原は、清水次郎長と行き来したことがあり、「中々懇意にして居た」という。初期の代議士選挙の際には次郎長の子分平田儀平が盛んに応援してくれたと述べている。一方、新門辰五郎とは、幕末の京都時代から付き合いがあったという。そして、二人に関する逸話を紹介した後、「次郎長も、辰五郎も、共に飽くまで男らしくて肝が恐ろしく大きい、然も何とも言へず可愛らしい、頼母しい気象を共有して居た、恐らく彼等は、日本の侠客と云ふものゝ打止めであらう」という言葉で結んでいる。

この江原の論説を、博徒礼賛論とみなす文献もあるが（田村栄太郎『やくざの生活』、一九八一年、雄山閣、二六三頁、はたして江原の真意をそのように断定することはできるだろうか。江原は、単に自身の過去における見聞を述べているだけであり、決して善悪を主張しているわけではない。

ただし江原がどう思っていたかは別にして、彼がその筋の人々から慕われたのは事実のようだ。明

治初年、沼津の親分某を説諭し正業に就かせ、兵学校や病院向けに牛肉・牛乳の販売を行わせた。以来、この親分は江原を「神の如くに敬ひ、家族の者にも熊堂の方へ足向けてはならぬ」と言っていたという。また、衆議院議員選挙に際しては子分数十名を率い、江原のために運動し、開票日には郡役所から江原宅までの道筋に配下の者を置き、得票状況を速報したとこのことである（『江原素六先生伝』逸話一三頁「改心せる博徒の感謝」）。沼津の親分某の実名は不明であるが、同時期、沼津には四方清左衛門という侠客（博徒ではないが）がおり、勝海舟や徳川家達との交友関係もあったらしいので（四方一渺「四方清のこと」『沼津史談』46、一九九五年）、彼を指している可能性もある。

そもそも、徳川慶喜と新門辰五郎、山岡鉄舟と清水次郎長の関係に見るごとく、静岡藩・旧幕臣と侠客とは浅からぬ関係があった。「強きを挫き弱きを助ける」をモットーとした侠客たちにとって、維新の敗北者は、支援や同情の対

象であった。戊辰戦争の過程では、時勢に乗って官軍に与した者がいた一方、旧幕府軍に肩入れしたり、東北諸藩を応援した博徒たちの存在が目につく。勝沼戦争に際し甲陽鎮撫隊に協力した伊豆の博徒熊五郎、戦死した彰義隊士の埋葬を行った三河屋幸三郎、伝習隊・草風隊の道案内をつとめた野州の博徒伝右衛門、会津藩に協力した越後の博徒観音寺久左衛門、仙台藩のからす組に子分とともに参加した博徒渡辺武兵衛、箱館戦争の賊軍戦死者を供養した侠客柳川熊吉など、枚挙に遑がない。

廃藩後、明治政府？が徳川家の動向をスパイした報告書には、「次郎長ト申モノハ、御一新已来徳川氏ノ恩ニ感シ（中略）静岡人余程高貴ノ所ニテ繋キ居ルヨシ」（徳川家回復ニ付探索書）『鹿児島県史料 玉里島津家史料五』一九九六年、六一四頁）とあり、清水次郎長と静岡藩・徳川家との高レベルでの親密さに着目している。

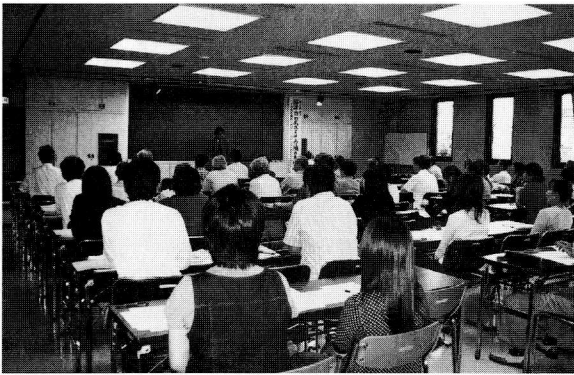
江原と辰五郎・次郎長の交遊もそんな時代状況を背景にしていたのかもしれない。（樋口雄彦）

お知らせ欄

◎企画展「沼津のあゆみ写真パネル展」の終了

8月28日(木)から9月28日(日)まで開催していた企画展「沼津のあゆみ写真パネル展」は無事終了いたしました。

また、企画展に合わせ、9月13日(土)に開催した歴史講演会「沼津市の成立とその後のあゆみ―市町村合併を中心に―」には、56名の受講者がありました。



▶歴史講演会の様子

◎古文書解読入門講座の結果

9〜10月に5回にわたって開催した古文書解読入門講座には、24名の受講者があり、江戸時代の古文書の解読に取り組みました。

◎企画展「沼津兵学校の文人たち」開催中

沼津は、若山牧水、井上靖、芹沢光次良、明石海人ら数多くの文人たちに愛された土地であることが知られています。彼ら著名な文人たちが生れる少し前、明治時代の初めに「沼津兵学校」がありました。当館の展示テーマの1つであ

企画展 沼津文学祭開催記念

沼津兵学校の文人たち

平成15年11月15日(土)～平成16年2月1日(日)

歴史講演会

・演題 「沼津兵学校の文人たち」

・と き 平成16年1月17日(土) 午後2時より(午後1時30分開場)

・講師 四方一弥氏 (元国士館大学文学部教授・沼津史談会会長)

・会場 明治史料館 講堂

・受付 12月2日(火)より電話にて受付

る沼津兵学校は、わずか3年半しか存続しませんでした。ここで教え、学んだ人材の多くは、軍人ばかりでなく官僚・学者・技術者・実業家・政治家・教育者などとして多方面で活躍し、数多くの人材を輩出したことが知られています。

その中には歴史小説を大成したといわれる塚原洪村、『沼津案内』などの地誌を編んだ間宮喜十郎、イソップ物語の翻訳をした渡部温、その他同人会を作って漢詩を嗜んだ者などがいました。今回の企画展では、今年から開

催される「沼津文学祭」を記念して、沼津兵学校ゆかりの「文人」たちと彼らの作品を紹介します。期間…平成15年11月15日(土)～平成16年2月1日(日) 場所…当館展示室

◎歴史講演会の開催

講師…四方一弥氏(元国士館大学文学部教授・沼津史談会会長)

演題…「沼津兵学校の文人たち」 日時…平成16年1月17日(土) 午後2時～4時

会場…当館講座室 定員…100名、参加費無料 申込み…12月2日(火)9時から当館まで電話で

◎年末年始の休館

12月29日(月)～1月3日(土)は年末年始の休館日です

沼津市明治史料館通信 第75号

編集 沼津市明治史料館 発行

〒410-0051 沼津市西熊堂三七二-1 電話 〇五五九二二三三三五 FAX 〇五五九二一三〇一八 http://www.city.numazu.shizuoka.jp/sisetu/meiji/index.htm